

紹介

隴谷壽・山中章編

『平安京とその時代』

本書は、平安貴族研究の第一人者として平安朝の研究を牽引してきた隴谷壽氏を中心に、京都に所縁の歴史学・考古学・地理学の研究者が、「平安京」をテーマに寄稿した総合論集である。氏の希望により「古稀」と銘打たれていないが、実質的には『隴谷壽先生古稀記念論集』である。

序「古稀を寿ぐ」——（山中章）に続き、第I部として歴史学関係の論文一〇本すなわち、撰関盛期の天皇の葬送（隴谷壽）、外戚土師氏の地位——桓武朝の皇統意識に関わって——（清水みき）、陽成天皇廃位の真相——撰政と上皇・国母——（瀧浪貞子）、王朝貴族と私名会——仮称「私名和歌集」（稿）の試み——（竹居明男）、祈年祭料の「白猪」と近江国——『言談抄』第一二話をめぐって——（田島公）、撰関期の身分集団と訴訟・復讐（西山良平）、『新

撰姓氏録』からみた京貴と改氏姓（仁藤敦史）、平安京の中心——中院と縁の松原をめぐる憶説——（橋本義則）、平重盛論（元木泰雄）、桓武天皇の近江行幸（吉水葉子）、続いて第II部として考古学・地理学の研究者による論考七本すなわち、平安京と地名研究の展望——「地名学」の現状と課題をふまえながら——（天野太郎）、撰関・院政期の京都における讃岐系軒瓦の動向（上原真人）、甦る古代京都の風景——平安時代を中心に——（梶川敏夫）、院政期の平安京——その予察へ向けて——（鋤柄俊夫）、平等院伽藍考（杉本宏）、保元の乱の関白忠通（山田邦和）、古代王権の伊勢支配——布勢内親王所領の伝領過程から——（山中章）、そして、「いまここ」につなぐ——「地べた」に根を張る文化の樹——（安藤榮里子）、町屋から、ほの見える平安京（山中恵美子）の二本が収められ、巻末に、御礼に代えて（隴谷壽）が置かれている。

総勢一九人の研究者がそれぞれの視点から意欲的なアプローチを展開し、多角的に平安京・平安時代を論じた総合的な研究書であり、近年多い平安京や平安時代につい

での個人研究論文集とは異なる特色を持ち、多分野の研究者による論文によって構成されたものとして、学会に資するところも大さかろう。

隴谷氏は、源氏物語アカデミー監修者、紫式部顕彰会副会長、国際京都学協会常務理事として多忙な毎日を通り越されておられ、二〇〇五年には京都府文化賞（功労賞）を受賞された。また、本書の最後の二寄稿は、隴谷氏の同志社女子大学での教え子で、京都からの情報発信活動に携わっておられる二氏によるものである。

本書が平安京・平安時代研究に新しい視点を加え、更なる進展を促すことを確信するとともに、隴谷氏のますますのご研究の進展をお祈りし、喜寿の際には、今回は除かれた近代までの幅広い分野の研究者による記念論集を希望して、拙い紹介を終えたい。

（紹介文を執筆するにあたり、山中章氏による序文を、大いに参考にさせていただきました。）

（A5判 四八八頁二〇一〇年二月

思文閣 九四五〇円（税込）

（告井幸男 立命館大学非常勤講師）